

ナサニエル・ホーソーンの南北戦争 ——“Chiefly about War-Matters”を読む

藤 村 希

本発表では、ナサニエル・ホーソーンの「主に戦事について」(“Chiefly about War-Matters. By a Peaceable Man,” 1862) を取り上げた。この作品は、南北戦争さなかの 1862 年 3 月から 4 月にかけて、首都ワシントンとその近郊を訪れた作家の経験をもとに書かれた旅行記風のエッセイだが、オハイオ州立大学出版によるホーソン全集のコメンタリーが述べるように、作家の作品のなかでも最も解釈の難しいものの一つと言える。「主に戦事について」には顕著な特徴として、本文が削除されたかのような省略記号や、作品が最初に発表された『アトランティック・マンスリー』誌編集者によるものと見える注が付いている。それらが実のところ、作品のタイトルに付けられた語り手「平和を好む男」と、その見解を批判し削除する編集者の一人二役をホーソン自身が演じたものであることは、すでに先行研究によって明らかにされている。しかし、そのような作品に仕上げた作家の意図についての疑問は残り、近年もさまざまな議論がなされている。この作品と、他の作品や手紙等で表明されたホーソンの見解との間には大きく異なるところもあり、それが作品の解釈を一層難しくする原因ともなっている。開戦から 150 年を迎え、南北戦争やホーソンの政治的態度について新たな研究が発表されてきており、それらの新しい知見をもとに、「主に戦事について」という作品をあらためて読み直してみたい

と考えた。

以上のような観点から、本発表では、同時期のホーソーン作品で南北戦争への言及を含む「北部義勇兵」(“Northern Volunteers,” 1862) と『われらが故国』(*Our Old Home*, 1863)、および作家の手紙も参照しながら、「主に戦事について」が示すホーソーン独自の南北戦争への参加のありかたを探った。大統領リンカーンの人身保護令状の停止に代表される戦時政策や、作家の周囲の人々、特にリンカーン率いる共和党を支持する北部の奴隷解放論者たちの善と悪、敵と味方を単純に二項対立化する言説といった同時代のコンテクストを確認したうえで、特に以下の点に注目して作品を検討した。第一に「主に戦事について」における本文と注の関係、第二に北軍総司令官ジョージ・マクレランについてのこの作品での描写と他の場所での作家による言及との間の相違、第三にピューリタン革命 (English Civil War) への作中の言及と南北戦争 (American Civil War) 当時にオリヴァー・クロムウェルになぞらえられ崇拝された奴隷解放論者ジョン・ブラウンとの関係である。その結果、浮かび上がってきたのは、南北戦争中の人々が陥った単眼思考にあえて抵抗する作家の姿である。「主に戦事について」は、本文削除と抑圧的な注によって同時代の言論・思想統制を目に見える形で提示し、そうすることによってそのような統制を批判するのみならず、本文と注を併置することによって複数の視点とそれらが可能にする討論、すなわち民主主義の要諦を守る実践にもなっていると結論づけた。